# めぐみさんへの手紙を書きませんか



<第三種郵便物認可>

## 正月、着物姿のめぐみさんを見て

東京社会部長 中村将

正月になると、家族はこたつに集まった。テレビを見ながら、ミカンをほおばったりしたものだ。

昭和52(1977)年の正月、新潟は静かだった。外は雪。横田めぐみさんは母、早紀江さん(83)とこたつで語らった。

「ママの時代のお正月ってどうだった?」

「着物を着て、ぼっくりはいて、はねつきしたよ」

「わー、いいなー」

京都生まれの早紀江さんの子供時代の話を聞いためぐみさんは目を輝かせた。

「めぐみちゃん、着物、着てみる?」

早紀江さんの着物を着せてもらうことになっためぐみさんは大はしゃぎだった。着付けはじゃない。後ろ髪を上げて結い、唇に紅も塗った。

「こんなにお姉さんになったんだ」。早紀江さんは、そう感じた。

めぐみさんを玄関前に立たせてシャッターを切ったのは父、滋さん(87)。着物や口紅の色と雪が映える背景のコントラストがめぐみさんを際立たせる。春に中学入学をひかえためぐみさんの着物姿の写真だ。



北朝鮮に拉致された昭和52年の正月、母、早紀江さんの着物を着た横田めぐみさん。父、滋さんが撮影した(提供写真)

あの年の11月、めぐみさんは北朝鮮に拉致された。この写真は今も悲しい思い出、早紀江さんは昨年来、めぐみさんの着物姿の写真のセレクトに触れた上で、「お正月の感慨もありませんが、いろいろなことを思いだしながら過ごすのでしょう」と語った。

昨年1月1日の本紙社会面で「めぐみさんへの手紙」を初めて紹介した紙面でもこの写真を使った。正月の写真だったからだ。

1年間で小中高生や大学生から数多くの手紙が寄せられ、機会がある度に早紀江さんに手紙の内容を伝えてきた。実際に読んでもらったのも相当数ある。早紀江さんは大人の娘…。病床の滋さんの枕元には3枚のめぐみさんの写真があるが、「着物姿」が含まれていないのは、やはり悲しい思い出だからだろうか。

「頑張って、頑張って、頑張って、頑張って…。それでも42年なんて、言葉に出すだけで腹が立ちます」。動かぬ現実、政府は何が手を施してくれているのか、否か。滋さんの体調…。もう精いっぱいな早紀江さんだが、「めぐみさんへの手紙」を読むと、「本当に男気づけられる」のだという。

「拉致被害者を忘れない」「拉致事件について一人でも多くの人に話す」。子供や若者の決意は広がり始めている。家族と正月を過ごした、ごく普通の少女が北朝鮮に連れ去られたままでいることを、わがことして人々が考えられる社会になればいい。そんな思いをめぐらせながら、今年も着物姿のめぐみさんの写真を掲載した。

## 千葉・八街市立朝陽小5年生の作文

# めぐみさんへの手紙

# 拉致解決へ 本気の願い

一昨年から始めた横田めぐみさん(55)=拉致当時(13)=らすべての拉致被害者に思いをつづる「めぐみさんへの手紙」に多くの応募が寄せられる中、千葉県八街市立朝陽小学校の5年生が産経新聞東京本社(東京都千代田区)を訪れ、「横田めぐみさんへ」と題した75人分の作文を届けてくれた。小学生には難解な拉致問題を真剣に考え、被害者の帰国を強く願う思いが伝わってくる。



千葉県八街市立朝陽小学校5年生の「めぐみさんへの手紙」に目を通す横田めぐみさんの母、早紀江さん=令和元年12月、川崎市

### あなたを助けたい一心 佐々木小夏さん

いつ帰ってくるんでしょう。拉致されたあなたは……。あの苦しみは、他の人には、わからない。そんな苦しみからあなたを救ってあげたい。あれから42年、いまだに帰ってこないあなたはどう思っているんでしょう。あなたのお父さんは、病気になって、後遺症で、うまく思いを伝えられません。そこまでの年になっています。

このことを知ったのは、学校の学年道徳のときです。そのことを知らずに生きていた自分がにくいです。

今は、あなたを助けたい一心です。早くもどってきてくださいね。めぐみさん。

私が20歳になったら拉致された人々を救うための団体にはいりたいです。絶対、絶対、絶対あなたを救ってみせます。信じて待っていてください、約束です。

### 愛情のつまった深い名前 石垣海人くん

めぐみさんお元気ですか。最近は夏とちがって寒くなってきましたね。ぼくはあなたをとある動画のようなもので知りました。

ぼくはあなたの「めぐみ」という名前にはすごく意味が深い、つまりお父さん、お母さんの愛情がつまっているような名前で、「すごい」と思いました。

それなのにお父さん、お母さんとはなればなれでさぞ悲しかったでしょう。ぼくも自分がさらわれたらどうなる、何を聞かれる、何をされる、かも心配でこわいです。死んじゃうかもしれない所につれていかれるのは誰でも同じ思いです。苦しい思いに一緒に聞いましょう。

もしぼくの手紙に返事が書けるならください。お願いします。

### みな無事を祈っています 眞榮城千宏さん

めぐみさん、初めまして。私は11年生きて、めぐみさんが拉致されているのを、初めて知りました。

あなたのお父さん、お母さん、そして弟さんの思いを映像で見て、めぐみさんのことをすごく心配していることが分かりました。

きっとあなたの家族、いや、それ以外の人も、めぐみさんが帰ってきたら「おかえりなさい」「苦しかったよね」と笑顔でむかえ、ささやいてくれると思います。それまでがんばってください。

日本国民はあなたや、他の拉致被害者が帰ってくるのを願っています。もし、それが今年なら「42年間、おつかれさまです」と言ってくれると思います。

私はいっこくも早く見つかってほしいと思います。あなたの両親も、そう思っています。そして何よりもめぐみさんや他の拉致被害者の無事を祈っています。

### できる限りの支援をしたい 加美陽子さん

私は、横田めぐみさんのことを、最初は、ニュースとかでやっていることを知りませんでしたが、学校の授業でめぐみさんのことを聞いて、実際の映像を見たら、北朝鮮が許せないと思いました。

理由は、めぐみさんのことを思い、今でも、病気になっていてもさがし続けている家族を見て、泣きそうになったからです。

自分は何かできることがないかと、考えたとき、まだ先だけど、成人したとき、めぐみさんを探せる範囲で探したいと考えました。めぐみさんの家族はとってもいい家族だと思います。弟さんもめぐみさんに会いたいと思いながら活動を続けています。私もできるかぎり支援をして、めぐみさんと家族が会える日がくることを願っています。

私が家族とくらせているように、めぐみさんにも、家族とくらしてほしい気持ちがたくさんあります。自分が拉致されたら、恐怖のどん底でどうしたらいいのかわからなくなります。それなのに、めぐみさんは、こわい思いをしながら生きていると思うので、どうか、家族のもとに帰って、だき合った姿を私に見せてください。そして、家族が笑顔でくらせる日を私は願います。

---

産経新聞社では、北朝鮮に拉致され、いまだに帰国が実現しない横田めぐみさんらすべての拉致被害者にささげる「めぐみさんへの手紙」を募集しています。対象は、小中高校生、大学生および同世代の方。学校や学年、クラス単位での応募も歓迎します。

応募されたすべての手紙は、拉致問題解決の世論喚起のために活用させていただくとともに、優れた手紙は紙面などで紹介させていただきます。また、拉致被害者家族にお渡しし、皆さんの切実な声をお届けします。

**【「めぐみさんへの手紙」応募方法】**

▶文字数　おおむね原稿用紙1～5枚(400～2000字)

▶送り先　郵送　〒100－8078(住所不要)産経新聞社編集局社会部「めぐみさんへの手紙」係

メール　news@sankei.co.jp

住所、氏名、年齢、電話番号(小中学生は学校・保護者の方の連絡先)を明記してください。

著作権は産経新聞社に帰属します。

**【拉致問題出前授業のお申し込み、お問い合せ】**

メール　nie-tokyo@sankei.co.jp

小学校から大学まで、年齢、学年、学校に応じて行います。

産経新聞社